

カリキュラム研究における批判的思考へのアプローチ

—H・マルクーゼによる技術的合理性の批判を中心に—

学校教育開発学コース 孫 于 正

The Critical Thinking in Curriculum Research :

Implications of the Herbert Marcuse's Criticism on Technological Rationalism

Woojung SON

In recent years, critical pedagogists have explored the study of new language and critical form in curriculum, based upon the criticism on modernity. This sort of research derived from the critical theory of Frankfurt School. They have pointed out that the technological rationalism had acted as a mechanism which promoted modern development and advance. But the very rationalism has weakened the human critical capacity. For that reason, critical pedagogists insisted that critical thinking should be key concept in the curriculum research. H. Marcuse considered the advanced industrial society as the "One-Dimensional Society" in which technological rationalism functioned as an ideological apparatus. This paper will review an approach to the critical thinking through considering his conceptions of counterplots against critical theory search as, 1) advanced industrial society, 2) positivistic methodology, and 3) culture industry. In consequence, I will rethinking implications of the critical thinking as "negative thinking", presupposing the "critical rationality" which has been pursued by the new language, that is, Criticism/Transcendence/Emancipation.

目 次

- I. はじめに
- II. H・マルクーゼにおける技術的合理性に対する批判
 - A. 先進産業社会
 - B. 実証主義的方法論
 - C. 文化産業
- III. 批判的思考へのアプローチ
 - A. 前提—「批判的合理性(critical rationality)」
 - B. 様式—「否定的思考(negative thinking)」
- IV. 終わりに
- 註

I. はじめに

本研究は、フランクフルト学派の批判理論の中においてヘルベルト・マルクーゼ (Herbert Marcuse, 1898-1979) による技術的合理性の批判を手がかりとして、カ

リキュラム研究における批判的思考を再検討することを目指している。

フランクフルト学派の批判理論は、実存主義と現象学を哲学的基礎としており、個人はイデオロギー及び社会・経済的な影響力によって抑圧の状態におかれ、抑圧そのものが個人的成長を抑制するという仮定から出発している。したがって、批判理論は、自己の自由な成長、発達のために既存イデオロギーからの解放を図ることを主な目的としている。さらに、フランクフルト学派は、現存する秩序、あるいは人間の意識と行為を普遍的な法則に従属させるあらゆる形態の合理性を拒否・否定する批判力を通して、イデオロギーからの解放をもくろむ点において、批判的思考の再検討に有用な手がかりを与えていると言える。

特に、フランクフルト学派の中においてもH・マルクーゼの批判理論は、ヘーゲルの「弁証法」とマルクスの「疎外論」、そしてフロイトの「エロス」思想を統合して、個人と社会を支配しているイデオロギーに関するより総

合的な見解を展開させてきた。彼は、個人と社会を支配しているイデオロギーを高度の先進産業社会の技術的合理性から見だし、このイデオロギーを弁証法的否定理論による批判様式、すなわち「弁証法的思考」を通して克服しようと努めていた。また、マルクーゼは、弁証法的思考は、ヘーゲルの弁証法的方法論である「矛盾と否定の論理」を批判様式として取っている「批判的な確信」として表現されると述べている¹⁾。すなわち、この批判的な確信が、弁証法的思考であり、批判的思考にはかならないだろう。

このようなマルクーゼの見解は、批判的教育学者であるジルー(H. Giroux)によってカリキュラム分野に受容、紹介されている。ジルーは、マルクーゼの技術的合理性に関する理論的ディスコースは科学と技術工学を新しい支配形態として結びつけている合理性を拒否するとともに、マルクーゼの「矛盾の論理と言語を発展させる思考能力」としての弁証法的思考には、今日の批判的教育学の精神と挑戦の意味が含まれていると述べている²⁾。すなわち、ジルーは、批判的教育学の精神をあらゆる支配形態に対する挑戦として見なし、この挑戦の方式を社会的行為と解放的変容の可能性を媒介しているマルクーゼの弁証法的思考様式から見つけなければならないと主張している。

以上に述べたように、マルクーゼの批判理論は、イデオロギー批判であり、具体的には先進産業社会の技術的合理性というイデオロギーを対象とする批判である。そして、このイデオロギー批判はイデオロギーからの解放を目的とし、この解放の目的は「矛盾と否定の論理」に基づいた批判的思考を通して達成されると展望しているのである。

本研究では、このようなマルクーゼの技術的合理性に対する批判をカリキュラム研究における批判的思考の再検討のための重要な手がかりとして用い、新しい批判的思考の前提とその批判様式を模索しよう。以下ではまず、マルクーゼの技術的合理性に対する批判を三つの領域、すなわち1) 先進産業社会への批判、2) 実証主義方法論への批判、そして3) 文化産業への批判に具体化させて検討したい。次に、技術的合理性に対する批判の検討結果を踏まえて、新しい批判的思考の前提と様式を模索し、最後に、以上の検討と模索から得られた示唆を論じたい。

II. マルクーゼにおける技術的合理性に対する批判

A. 先進産業社会

H・マルクーゼにおける先進産業社会に対する批判は、1964年に出版された『一次元的人間』と、その予備的な構想になったと思われる1941年の『哲学と社会科学の研究(Studies in Philosophy and Social Science)』に発表された「近代テクノロジーに関する幾つかの社会的示唆(Some Social Implication of Modern Technology)」を中心に展開されている。マルクーゼは、これらの論文の中で、近代の大規模産業の発展過程を通して社会に行きわたっている技術的合理性の問題を扱っている。

マルクーゼにおける先進産業社会に対する問題提起は、彼の特徴づけている批判理論の目的と密接に関連している。彼は、批判理論は、「社会のもつ諸能力が、ヒューマン・コンディションを改善するために用いられ、用いられなかったり、あるいは誤用されたりする点に照らして、その社会を分析するものである」と述べている³⁾。

そして、彼は、先進産業社会のもつ諸能力をテクノロジーから見だし、そのテクノロジーの生み出している結果を社会と人間の改善状態に照らして分析、批判しているのである。

さて、先進産業社会においてテクノロジーが作り出している結果は、一体何であろうか。

まず、マルクーゼは、テクノロジーを一つの社会的過程として把握していた。彼は、高度化された社会においてテクノロジーとは、「生産モードや道具や機械装置の総体だけでなく、社会的諸関係を組織し、持続させるモードであり、一般的な思考方式と行動モードの表現であり、統制と支配の手段」であると述べている⁴⁾。すなわち、テクノロジーの発展過程は、単なる技術の進歩のみで理解されることでなく、人間の思考作用にまで影響を及ぼしていることを示している。

そして、マルクーゼは、テクノロジーが人間の思考や行動の表現まで統制、支配するようになった過程を合理性の権力として説明している。すなわち、マルクーゼは、技術の発展過程は、結局、新たな合理性と個性(individuality)の新しい基準を社会の全般に広げると同時に、この新しい合理性が、まさしく伝統的な合理性である個人主義的合理性から転換された「技術的合理性」であると主張している⁵⁾。

このように個人主義的合理性から技術的合理性に転換された合理性の原理が、思考様式にまで浸透し、抵抗や

反抗のさまざまな形態さえも規定するようになったのである。そして、マルクーゼは、技術的合理性は、「人間の思考と行為を機械化過程の合理性に従属させ、技術的合理性のそれ自体を判断基準として人間の抽象能力ばかりでなく、まだ果たされない潜在力に対する信念さえもを失ってしまうように助長している⁹⁾と強調している。

さらに、マルクーゼは、この機械化過程は「ものを機械的に理解させるために持続的な訓練」を要求し、またこの訓練は「現存のスケジュールに対する順応」と「幾分か訓練された洞察と、あらゆる量的な調節と適応方式においてたやすい戦略」を強調すると特徴づけている⁷⁾。したがって、「順応のメカニズム (mechanics of conformity)」が、技術的秩序から社会的秩序へと広まり、工場や仕事場ばかりでなく、オフィス、学校、集会、さらに休息や娯楽の領域まで浸透して、人間の行為と思考が支配されるという。

結局、個人は外部の強制によることでなく、彼を調整、適応させる工場や学校などの装置⁸⁾の合理性によって思考や行為の表現モードを制限され、最終的には技術的合理性によって思考の標準化や個性の画一化をもたらすようになるわけである。

そして、マルクーゼは、このような技術的合理性の専横を、「批判的合理性 (critical rationality)」と「批判的真理 (critical truth)」の回復を通して克服しようともくろんでいた。すなわち、マルクーゼは、「批判的合理性は、個人主義的社会の自明な真理である自律の原理から派生したものと、個人主義的社会のそれ自体のイデオロギーを代表として、社会的不正義を告発し、批判的真理は装置に敵対的であり、あらゆる個人的関係と社会的関係を具体化させる際にのみ価値が実現される批判的合理性に属するもの」であると説明していた⁹⁾。

つまり、批判的合理性は、解放の機能を含んでおり、先進産業社会のテクノロジーより制限、統制されている人間の思考と行為を解放する可能性を抱えている合理性であると言える。

以上で検討したように、マルクーゼによれば先進産業社会は、大規模産業の技術的発展により広まった技術的合理性により、ヒューマン・コンディションを改善したのではなく、むしろその技術的合理性により人間の思考や行為が縛られようになり、ついには思考の標準化や個性の画一化をもたらす結果を生み出したのである。つまり、マルクーゼの言うようにテクノロジーにより支配される「一次元的な社会 (one-dimensional society)」¹⁰⁾と「一次元的思考」¹¹⁾のみが通じる社会をもたらしたと言えるだろう。

B. 実証主義的方法論

マルクーゼにおける実証主義に対する批判は、主に『理性と革命』と『一次元的人間』、そして「歴史的法則の問題に関するノート (Notes on the Problem of Historical Laws)」の中に集中的に論議されている。『理性と革命』においては、ヘーゲルの「否定の哲学」に反対する反ヘーゲル主義的な傾向として19世紀の実証主義の系譜、特に実証主義的社会理論に対して批判している。「歴史的法則の問題に関するノート」においては、ポパー (Popper) の『歴史主義の貧困 (The Poverty of Historicism, 1957)』に対する批判的評価を、そして『一次元的人間』においては、技術的合理性の批判の見地から近代の実証主義を批判している。ここでは、技術的合理性と関連された論議を中心に実証主義的方法論に対する批判を検討したい。

マルクーゼは、技術的合理性を、先進産業社会の支配的なイデオロギーとして把握すると同時に、技術的合理性の方法論的起源を実証主義に見いだしていた。まず、マルクーゼは、テクノロジーが新しい合理性へ転換されていく過程を次のように説明している。

「テクノロジーによる自然の変形を計画し実行する社会は、人格的な依存関係を事物の客観的な秩序への依存関係にしないで置き換え、それによって支配の土台を変えるし、技術的合理性は、自然の量化によって現代の支配的な理性になった。そして、数学的構造による自然の解明にまでゆきついたこの自然の量化は、現実をあらゆる内在的な自然から引き離し、その結果、科学を倫理から引き離し、このように量化しうる属性だけを備えている客観的世界は、その客観性において、ますます主観に依存するようになる。長期にわたるこの過程は、目に見える幾何学的な図形を純粋な精神的操作 (頭のなかだけで行う演算) に置き換える幾何学の代数学化から始まり、この過程の極限的な形態が、自然科学のすべての内容を数学的もしくは論理的な関係へ解消してゆく近代科学哲学である」¹²⁾

しかし、マルクーゼは、このように科学が自ずから付与した哲学それ自体の方法が、結果的に思考の縮小をもたらしていると警告し、この近代の科学哲学が、まさしく既存事実の権威に理性を屈服させようとした実証哲学、いわば実証主義である。そして、マルクーゼは、この科学哲学の中立性を肯定的性格であると批判する。マルクーゼは、サン・シモン学派により最初に用いられた「肯定的 (positive)」「実証主義 (positivism)」には、「1) 認識的思考を事実の経験によって確認すること、2) 認識的思考を確実性と精確さのモデルとしての自然科学の方

角に向けること、そして3)知識の進歩はこの方位決定に基づいているという信仰¹³⁾などの意味内容が含まれていると述べている。

しかし、マルクーゼは、サン・シモンの実証主義におけるディスコースと行動の世界は技術主義的な現実の世界であり、この世界において、対象世界は、道具に変形されつつあると評価していた。道具的世界の外部にあるものの多くは、いまや科学的・技術的進歩の範囲にあるものとして現れてくるからである。

なお、マルクーゼは、近代の実証主義は、その世界を混乱させる外部要素の侵入に対しては保護された世界であり、閉鎖的である述べている。マルクーゼは、その閉鎖性を実証主義の意味内容に関連づけて次のように説明している。「事実に抑圧されて経験された世界は、制限された経験の結果であり、精神の実証主義的浄化は精神が経験に従うようにするわけである。すなわち、経験的なものの徹底的受容はかえって経験的なものを侵害することになる。なぜなら、与えられたものだけしか経験せず、事実は所有しているが諸要素は持つことなく、一次元的で操縦された行動にすぎない不具にされた抽象的な個人であるからである」¹⁴⁾

このように浄化された形において、経験的世界が実証主義的思考、いわば肯定的思考の対象となるわけである。しかし、マルクーゼの立場においては、人間が考えたり生活したりする抑圧の諸条件のもとにおいて、思考、すなわち現状内での実用的な方向づけに局限された何らかの思考様式は、実証主義のように「与えられた事実」だけに関わるのではなく、事実の「背後にまわる」ことによるのみ事実を確認し、事実に対応することができると思なしている。そして、マルクーゼにおいて事実とは、人間の自然及び社会に対する歴史的闘争の中の出来事であり、その事実性は歴史的なものであり、たとえそれが征服されざる非情な自然の事実であっても歴史的なのである¹⁵⁾。つまり、マルクーゼは実証主義の肯定的思考を一次元的なものとしてみなす一方、否定的思考を理性の本質として把握し、その回復を実証主義の批判を通して追求している。

このように、マルクーゼによる実証主義的方法論に対する批判は、実証主義の形式的・数学的論理学に批判理論の弁証法的論理学を対比させることによって、弁証法的論理の科学性を確保、拡散させる一つの方法論的戦いであると言えるだろう。

C. 文化産業

そもそも、「文化産業(culture industry)」という言

葉は、ホルクハイマーとアドルノの『啓蒙の弁証法』で、最初に用いられた表現である。彼らは、啓蒙の欺瞞の性格が近代に至っては「文化産業」の中に現れていると指摘し、この文化産業に対する批判の要諦が技術的合理性による文化の画一性であると主張している¹⁶⁾。

マルクーゼは、ホルクハイマーとアドルノの文化産業に関する見解を、より体系化、精巧化させ、文化産業、広い意味において文化に関する論議を展開させている。ここでは、文化産業の生み出した結果をマルクーゼが規定している「大衆」の意味と、高級文化との関連に焦点を合わせて検討したい。

マルクーゼは、先進産業社会において技術的合理性を支配的なイデオロギーとして定着させる権力が産業装置の増大によることであると見なしている。まず、マルクーゼは、テクノロジーと産業装置との関係を次のように説明している。

「技術的権力は、経済的権力に集中される傾向がある。すなわち、技術的権力は、大単位の生産、巨大な法人企業体、産業帝国などのために経済力を集中させ、全企業を支配する傾向がある。この際、効率性は浪費を除き、不必要なプロセスを排除するために完全な統一と単純化を必要とする。これらの状況において装置は、生産される商品の量、形態、種類を決定するようになる。そして、このような生産と分配の様式を通して装置の持つ技術的権力は、その権力の作用するあらゆる領域の合理性に影響を及ぼすようになる」¹⁷⁾

すなわち、このような装置の影響の中で、伝統的な個人主義的合理性が技術的合理性に転換されたし、さらにこの技術的合理性は装置の機能にのみ効力をもつ真理的価値(truth values)、いわば、技術的真理(technological truth)を発展させるようになるのである。

マルクーゼは、このような技術的真理の発達が思考の標準化をもたらし、この標準化された思考は、産業装置に敵対的である「批判的真理(critical truth)」に影響を及ぼし、このような影響力が、結果的に批判的思考の社会的萎縮を招き寄せると述べて、批判的思考の萎縮された集団を「大衆」と規定している¹⁸⁾。すなわち、批判的思考は産業装置の増大とあらゆる生活領域に対する産業装置の全面的な統制の増大によって萎縮されるようになったと言える。したがって、先進産業社会において大衆の重要性と意味は、合理化の増大とともに高まられ、それと同時に大衆は産業機構の存在を永続させる保守的勢力に転換されるのである。

以上のように技術的合理性により無力化された大衆は、また別の結果、すなわち官僚主義を生み出したとマルクー

ぜは述べている。官僚主義は、「機能の合理的専門化による客体的・非人格的土台から生まれたものであり、この合理性はまた隷属の合理性を増大することに寄与する。そして、技術的合理性の客体的・非人格的性格は官僚集団に理性の普遍的威厳を与える。大規模産業の利害関係の効率的実現は経済的統制から全体主義的な政治的統制への転換のための強力な動機の一つになった¹⁹⁾」と言う。

しかし、マルクーゼは技術的進歩が多様な個人の特性を個別化の元の土台まで引き下ろしたが、まさにその土台が新たな形態の人間の発展の基礎になるかもしれないと楽観的な展望を見せている。

また、マルクーゼは、技術的合理性の進歩は、「高級文化」の中にある反抗的・超越的要素を除くことによって、文化と社会の敵対状態を鈍化させ、政治的統合に相応する文化領域においての統合をもたらしていると指摘している。マルクーゼは、そもそも高級文化は、常に社会的現実と矛盾関係にあり、少数の特権階級のみが高級文化を楽しんできたと言う。しかし、高級文化は、現実に対する「もう一つの次元」を構成する。マルクーゼはこれを「二次元的」文化として表現し、この二次元的文化を可能にするのが高級文化の中にある反抗的・異質的・超越的要素であると述べている²⁰⁾。

そして、マルクーゼは、このような文化領域で起きていることが、高級文化の大衆文化への退歩ではなく、現実による高級文化の破壊であると指摘している。すなわち、マルクーゼは、文学と芸術は本質的に矛盾を持続させ、保護する疎外であったし、この芸術的疎外は既存の現実原則と相容れない文化的イメージを生み出していると言う²¹⁾。また、マルクーゼは、芸術的疎外が発展する社会と相容れないことは、芸術が真実である証拠にほかならないし、儀式化された芸術にせよ、儀式化されていない芸術にせよ、芸術は否定の合理性を含んでおり、進んだ状態の芸術は「現存するもの」に対する抵抗、すなわち「偉大な拒絶」を含んでいると表現していた²²⁾。

つまり、マルクーゼは、文化としての芸術を現存しているあり方を拒否し、突き破り、造り変える様式として受け入れているが、発展する技術的現実には、芸術作品を商品化し、売買したりして、芸術に交換価値のみを与えていると批判しているのである。すなわち、マルクーゼの文化産業に対する批判は、テクノロジーの権力が経済的権力と結託し、産業装置を増大させ、結果的には商業秩序とは無関係な一種の高級秩序としての文化の真理さえ変質させていることへの批判として要約されるだろう。

以上で検討したように、マルクーゼの技術的合理性に

対する批判は、テクノロジーが先進産業社会の構造の中で、実証主義という科学的方法を持ち込んで、文化産業という対象を通して支配的なイデオロギーとして専横されていることを鋭く暴いたものである。さらに、彼の批判は、このような技術的合理性が人間を機械化・画一化・同一化させ、結果的には人間の批判的思考を麻痺させていることを明らかにしている。

Ⅲ. 批判的思考へのアプローチ

以下では、以上で検討したマルクーゼの技術的合理性に対する批判を手がかりとして、批判的思考の新しい前提と批判様式を模索したい。

A. 前提一「批判的合理性 (critical rationality)」

近代の技術的合理性がカリキュラム領域に浸透してきたのは、1920年代の教育の「科学化運動」においてであった。教育の科学化運動は、カリキュラム研究に体系的・科学的発達という新たな教育的任務を設定し、これを達成するために合理主義を背景とする社会的効率性、科学的経営、実験、測定などのアイディアを採用してきたと説明されている²³⁾。しかし、これらのアイディアは、テイラー (Taylor) システムと呼ばれる産業システムのオートメーション化の考えから引き出された原理であり、カリキュラム研究の思考方式、探求言語、研究の特徴などを、技術的・工学的合理性の原理を踏まえて道具化させることを助長してきた。

したがって、ここでは、カリキュラム研究における批判的思考を技術的・工学的合理性を越えて、批判 (criticism)、超越 (transcendence)、解放 (emancipation) を前提とする合理性として再概念化したい。

第一に、批判的思考は、「批判 (criticism)」を前提とする合理性として再概念化する概念である。上に述べたように、伝統的なカリキュラム理論は、科学的・技術的原理を背景とする合理性として構成されている。このような技術的合理性は、統制と確実性の原理につながっており、自然科学を理論的なモデルとしている。自然科学をモデルとする思考は、マルクーゼの指摘したように現実世界を道具的世界に変形させ、思考の縮小をもたらしており、既存社会の事実に対する批判の合理的根拠を提示することに失敗していると見られる。ジューは、この失敗をカリキュラム研究に浸透している20世紀の科学的経営運動の影響として説明し、この現象を学校教育の哲学的基礎の「政治」から「技術」への転換であると特徴づけている²⁴⁾。したがって、批判的思考へのアプロ

チは、技術と科学の歪曲された言語により喪失された「批判」を合理性の前提とする批判的合理性において再概念化されなければならない。

そして、批判とは、技術と進歩の意味を越えて、一種の政治的実践として把握されなければならない。政治的実践としての批判は、マルクーゼの強調したように安定性・肯定性に対する批判を意味する。すなわち、ひたすら体制肯定的思考、いわば「順応のメカニズム」に適応、調整される思考は、批判の概念に含まれないということである。この安定的、肯定的性格に抵抗する思考が、批判的思考において求められるべき合理性になるだろう。

さらに、批判は、弁証法的で、イデオロギー批判の方法として特徴づけられる。批判的教育学者は、批判の弁証法的方法を次のように説明している。すなわち、まず社会を把握する際に、破壊されているが、弁証法的に再建されうる「総体性」を反映しようとする試みである。つぎは、このような試みを構成する方法に対する自己反省の過程において、喪失された「統一性」を弁証法により復活させることである²⁵⁾。

これは、現実により制限され、現実化されないまま潜在的に隠されている実存の真正な内容と本質的な存在を復活させる弁証法的否定のもつ目的でもある。特に、弁証法的方法は、人間の行為と思考が、技術的合理性により完成された特殊な形態によって想像力ばかりでなく、まだ果たされない潜在力に対する信念さえも失ってしまう、という現状を救う重要な概念になるだろう。そして、イデオロギー批判としての批判は、批判的思考の重要な位相である歴史意識を回復させる可能性を提供している。

つまり、批判的思考は、技術的、科学的合理性を越えて、政治的要素と弁証法の否定を方法論として採用する「批判」を前提とする合理性から再概念化されうるだろう。

第二に、新しく概念化される批判的思考は、「超越」という言語を前提とする合理性として明確化されうる。特に、超越の概念は、既存の事実世界を正当化の究極の文脈として受け入れることを拒否し、事実をその抑えられ否認されている可能性に照らして分析することを可能にする。マルクーゼは、「超越する (transcend)」や「超越 (transcendence)」の用語を、終始、批判の意味で用いている。つまり、一定の社会において既成のディスコースや行動の世界をその歴史的選択肢（現実の可能性）の方向へ「オーバーシュート」してゆく理論的・実践的傾向を指している概念である²⁶⁾。これらの文脈に基づいて、超越こそ合理的な精神であり、批判的精神に基づいて成立する批判的思考であり、合理性であると言え

るだろう。

第三に、批判と超越を前提とする批判的思考は、「解放」を前提要件とする合理性として再概念化されるだろう。

カリキュラム研究において解放という言葉は、批判理論の中心概念として、社会慣習や価値体系や慣行などの既定化されたイデオロギーからの自己の自由な成長と発達を意味する概念として使われている²⁷⁾。すなわち、解放はイデオロギーを修正して、批判的思考と実践の基礎を提供する概念であると同時に、権力に抵抗する社会組織の形態を要求する。

さらに、解放は、制度化された教育に関わっているあらゆる人に彼らの経済生活を支配する制度、彼らの社会生活を規定する規則と慣習、そして彼らの心理的生活に関係する価値体系や理想などの価値を再評価するように促す概念である。なぜなら、これらすべてが批判の対象になる支配的イデオロギーを象徴化し、生み出しているからである。

解放は、統制と确实性の原理に関わっている技術的合理性から批判的思考を区別する重要な概念でもある。解放の追求する合理性は、批判と行為の原理に基づいて、社会的文脈がいかに人間の思考と行為に特殊な限界と圧力を加えるかを明らかにすることである。

そして、解放を前提とする合理性は、個人の自由と福祉の側において制限的で、抑圧的であると同時に、支持されていることを批判することを目的とする。このような合理性の様式は、それ自身の歴史的発生を省察し、再構成するための批判的思考の能力として再構成される。すなわち、思考、それ自体の過程に関して思考することは、思考の推論の様式として、支配的社会の合理化が根拠としている世界と日常生活に対する批判を妨げる硬直したイデオロギーの克服を目的としている²⁸⁾。

したがって、解放を前提とする合理性は、矛盾的な論議様式と価値の中から生まれてくる抵抗行為を重要な批判様式として捉えることを可能にする。そして、この抵抗行為の本質と意味は、マルクーゼが説明したように「主観性と客観性のあらゆる領域において感受性・想像力・理性の解放に対する積極的介入²⁹⁾」を発展させる可能性をどの程度含んでいるかによって規定されている。

B. 様式一否定的思考 (negative thinking)

以上で述べたように、カリキュラム研究において批判的思考は、「批判」「超越」「解放」を前提とする合理性として捉え直され、究極には現実に対する批判、抵抗を通じて解放に向けて進んでいく思考方式として再概念化

することができるだろう。そして、批判的思考において「批判」とは、単なる懐疑主義や否定論とは異なり、知識の歴史的、関連的、規範的領域を強調する批判様式、すなわち弁証法的方法論として説明されるだろう。

つまり、批判様式としての弁証法的方法論は、思考の画一化や同一化に寄与してきた実証主義に対置される方法論なのである。マルクーゼは、この思考様式としての弁証法を、常識の安定性と日常の無関心を取り除き、常識の与える「保証」を根底から覆す弁証法的過程として説明し、この弁証法的思考の復活をヘーゲルの「矛盾の精神」すなわち、否定性の意味を通して主張したのである³⁰⁾。

弁証法的思考は、世界がそもそも否定性と矛盾として構成されていると把握するのである。事実性に支配される常識のヘゲモニーを瓦解させるために、マルクーゼは、現実の内在的矛盾を露わにしなければならないと考えている。したがって、矛盾の論理と言語を発展させることが必要である。存在の肯定性に対して弁証法的な否定を試みるマルクーゼの目的は、事実性により漸減され現実化されないまま潜在態として潜んでいる実存の真正な内容、その本質的な存在を復活させることである。弁証法の方法は、存在と本質の正しい同一性を生み出しながら存在をその真正な内容に適合させる契機を提供する。すなわち、「媒介と止揚」を通して否定性を肯定的なものに変換させるために矛盾を発見するのである。

さらに、マルクーゼは、矛盾の論理と否定の言語を芸術の真理として表現し、芸術が順応するノモス³¹⁾は、既存の現実の原理の規範ではなく否定の規範であると述べている。しかし、単なる否定は抽象的なものであり、不当なユートピアに陥るだけだろう、偉大な芸術におけるユートピアは、現実の原理に対する単なる否定ではなく、過去と現在がその実現性に向けている超越的な保存であると言う³²⁾。

カリキュラム研究においてこの弁証法的思考は、ジューにより強調されている。彼は、批判的思考は、まず生徒を社会の基準にはめ込むのではなく、生徒の想像力、知力を励ますことから始めなければならないと主張している。そして、彼は、批判的思考の新しい次元は、科学と技術を新しい支配形態として結合させた技術的合理性との断絶から出発する自由と自己の解放を図ることを、目標とする思考として説明している。そして、ジューは、この目標の実現をマルクーゼの「否定の言語」に見だし、批判的思考を、否定の様式として捉え直そうと試みている。つまり、批判様式としての否定は、現存社会に対する絶望ではなく、可能性を提示する発展された思考

様式として捉えられているのである。

批判的合理性を前提とする思考様式は、「否定」の様式による「否定的思考 (negative thinking)」として実現される可能性を持っている。そして、否定的思考とは、問題化する (problematizing) 志向による思考様式とも言える。マルクーゼが先進産業社会のイデオロギ的性格を安定的・肯定的であると批判するのも、まさしく、この問題化する思考の重要性を指摘したからであろう。そして、現実を批判し否定する否定的思考には、概念化されない苦悩という感性が静められており、まさしくこれが肯定に向かっていく推進力になっているのである。

IV. 終わりに

マルクーゼの技術的合理性に対する批判は、批判的教育学者をして批判的思考をカリキュラム研究の中心概念として据えることに大きな貢献をもたらしている。

最後に、マルクーゼのカリキュラム研究への示唆を、批判的思考をカリキュラム研究の中心概念として導入した点に注目して、次のように要約しておこう。

第一に、批判的思考の概念に「政治的」批判の意味を加えたこととして要約される。従来のカリキュラム研究は、批判的思考を「問題解決力」「意思決定過程」「探求」など多様に定義してきたが、「政治的」批判としての意味は欠いている。したがって、学校における反抗や抵抗行為は、逸脱や不適応など心理学的カテゴリーとして分類され、反抗や抵抗を生み出す学校や教室の状況と権力関係はカリキュラム研究から無視されてきた。しかし、マルクーゼの技術的合理性に対する批判は、批判的思考の概念を社会的文脈の中に位置させ、思考と行為を支配している合理性だけでなく、その合理性の既存関係に含まれている本質と歴史的発展をも露わにしている。すなわち、批判的思考は、学校や教室に隠されている支配と統制の権力関係を暴露する「政治的」実践の概念として捉え直すことができる。そして、この暴露の機能が、まさしく批判理論の批判的思考を従来の批判的思考から区別している。

第二に、批判的思考の批判様式を「否定」として捉え直すことである。批判様式としての否定は、マルクーゼの主張しているように批判的思考を「矛盾の論理と否定の言語」を通して発展させることとともに、抵抗や反抗の概念を矛盾的な論議様式と価値から創出される批判的思考の様式として発展させていく可能性を与えている。したがって、カリキュラム研究における批判的思考へのアプローチは、抵抗や反抗を逸脱、不適応、劣等などの

精神病理的現象として捉えることでなく、個人の意識や感性やパーソナリティのレベルまで拡張させていくことである。

最後に、以上のように、マルクーゼの技術的合理性に対する批判は、「政治的」実践と「抵抗」の概念を批判的思考の中心概念として受け入れることに寄与すると同時に、批判的思考を解放を目指していく思考として再概念化することを可能にする。解放とは、マルクーゼは主張しているように「個人の成長と発展を抑制、抑圧」する、あらゆる拘束からの自由を意味する。すなわち、解放は、批判的思考を個人の想像力、創造性を促す概念として捉え直すことにより、批判的思考の概念を芸術的次元まで拡張させて行く可能性を提示するだろう。

(指導教官 佐藤学助教授)

註

- 1) Marcuse, Herbert, *Reason and Revolution*, New York:Oxford University Press, 1960 p.11, p.164参照.
- 2) Giroux, Henry, *Theory and Resistance in Education: A Pedagogy for the Opposition*, Bergin & Garvey, 1983, pp. 1-8参照.
- 3) Marcuse, H., *One Dimensional Man*, Boston:Beacon Press, 1964, p.x. (H・マルクーゼ 『一次元的人間』生松敬三・三沢謙一訳, 河出書房新社, 1980, p.8.)
- 4) Marcuse, Herbert, "Some Social Implication of Modern Technology", *Zeitschrift für Sozialforschung (Studies in Philosophy and Social Science)*, 1941, Vol.IX, No.3, p.414.
- 5) *Ibid.*, pp.415-417.
- 6) *Ibid.*, p.420.
- 7) *Ibid.*, p.421.
- 8) マルクーゼの説明によれば、装置 (apparatus) とは、現存する社会的背景の中における産業上の制度 (institutions), 計略 (devices), 組織 (organization) などを意味する。 *Ibid.*, p.417, 注6参照
- 10) Marcuse, H., 1964, *op.cit.*, pp.1-120
- 11) *Ibid.*, pp.123-199.
- 12) *Ibid.*, pp.146-148参照.
- 13) *Ibid.*, p.72.
- 14) *Ibid.*, p.182.
- 15) *Ibid.*, p.185.
- 16) ホルクハイマー・アドルノ (1947) 『啓蒙の弁証法』徳永恂 (訳), 岩波書店, 1990, pp.183-261.
- 17) Marcuse, H., 1941, *op.cit.*, p.416.
- 18) *Ibid.*, pp.426-429参照.
- 19) *Ibid.*, p.430.
- 20) Marcuse, H., 1964, *op.cit.*, pp.56-57参照.
- 21) *Ibid.*, p.72.
- 22) *Ibid.*, p.63.
- 23) Eisner, E.W., *The Art of Educational Evaluation*, London:The Talmen Press, 1988, p.14.
- 24) Giroux, Henry A., "Critical Theory and Rationality in Citizenship Education", *Curriculum Inquiry*, 1980, Vol.10, No.4, pp.330-331.
- 25) Schallerは、批判を科学理論的要求から三つ、すなわち、1) 精神科学的-解釈学的方法, 2) 新実証主義的-経験的方法, 3) 弁証法的-批判的方法に区分している。そして、彼は、弁証法的批判はフランクフルト学派の批判理論から生まれた方法として解釈学と経験論を総括する批判として定義している。 Schaller, Klaus, *Einführung in die Kritische Erziehungswissenschaft*, Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1974. (呉インタク・催ジェクション訳『批判的教育科学概論』ソウル:良書院, 1992, pp.21-47.)
- 26) Marcuse, H. 1964, *op.cit.*, pp.xi-xii
- 27) Schubert, Williams H., *Curriculum: Perspective, Paradigm, and Possibility*, New York: Macmillan Publishing Co., 1986, p.318.
- 28) Giroux, Henry A., 1980, *op.cit.*, pp.347-349.
- 29) Marcuse, H., *The Aesthetic Dimension*, Boston:Beacon Press, 1978, p.22.
- 30) Marcuse, H., 1960, *op.cit.*, p.vii.
- 31) ノモス (nomos) とは、芸術それ自体の律法を意味している。
- 32) Marcuse, H., 1978, *op.cit.*, pp.72-73.